

[00:04.00] 午後の最後の芝生村上春樹

[00:12.00] 僕が芝生を刈っていたのは18か19の頃だからもう14年か15年前のことになる結構昔た

[00:23.00] 時々14年か15年なんて昔というほどのことじゃないなと考えたりもする

[00:32.00] ジムモリソンが Light My Fire を歌ったり Paul McCartney が long and winding road を歌っていたりした時代がそれほど昔のことだなんて僕にはどうもうまく実感できないのだ

[00:46.00] 僕自身あの時代に比べてそれほど変わっていないんじゃないかと思うことだってある

[00:54.00] でもそんなはずはない

僕はきっとかなり変わってしまったはずだ

というのはそう思わないと説明のつかない事が結構たくさんあるからだ

[01:08.00] OK 僕は変わったそして14年というのはずいぶん昔の話である家の近所に公立の中学校があって

[01:21.00] 僕は買い物に行ったり散歩したりするためにその前を通る

そして歩きながら中学生たちが体操をしたり絵をかいたりふざけあったりしているのをぼんやり眺める

[01:37.00] 別に好きで眺めているわけじゃなくて他に流れるものがないからだ

ミニテの桜並木を眺めていてもいいのだけれどそれよりは中学生を眺めていた方がまだました

[01:51.00] とにかくそんな風に毎日中学生を眺めていてある日ふと思った彼らは14か15なんだぞ

[02:03.00] これは僕にとってはちょっとした発見でありちょっとした驚きだった

[02:09.00] 14年か15年前には彼らはまだ生まれていないか生まれていたとしてもほとんど意識のないピンク色の肉塊だったんだ

それが今ではもう口紅を塗った

[02:23.00] 体育倉庫の隅でタバコを吸ったりマスターベーションをやったりディスクジョッキーに降らない葉書を出したい

どこかの家の塀に赤いスプレーペンキで落書きをしたり戦争と平和を読んだりしているのだ

[02:42.00] やれやれと僕は思った

14年前といえばぼくが芝生を刈っていた頃じゃないか

[02:52.00] 記憶というのは小説に似ているあるいは小説というのは記憶に似ている

僕は小説を書き始めてからそれを切実に実感するようになった

[03:06.00] 記憶というのは小説に似ているあるいは云々

[03:14.00] どれだけきちんとした形に整えようと努力しても文脈はあっちにいたりこっちにいたりして最後には文脈ですらなくなってしま

[03:26.00] なんだかまるでぐったりした子猫何匹か積み重ねたみたいだ
生暖かくてしかも不安定だ

[03:38.00] そんなものが商品になるなんてすごく恥ずかしいことだと僕は時々思う本当に顔が絡むことだってある

僕が顔を赤らめると世界中が顔を赤らめる

[03:54.00] しかし人間存在を比較的純粋な動機に基づくかなり馬鹿げた行為として捉えるなら何が正しくて何が正しくないかなんて大した問題ではなくなってくる

[04:09.00]そしてそこから記憶が生まれ小説が生まれる
これはもう誰にも止めることのできない永久運動機械のようなものだ

[04:20.00]それはカタカタと音を立てながら世界中を歩き回り地表に終わることのない
一本の線を引いていく
うまくいくといいですねと彼は言う

[04:35.00]でもうまくいくわけなんてないのだからうまくいったためしもないのだ
でもだからって一体どうすればいい

[04:48.00]というわけで僕はまた子猫を集めて積み重ねていく

[04:54.00]子猫たちはぐったりとしていてとても柔らかい
目が覚めて自分達がキャンプファイヤーの薪みたいに積み上げられていることを発見した時
子猫たちはどんな風に考えるだろう
あれなんだか変だなと思うくらいかもしれない
もしそうだとしたら僕は

[05:18.00]少し救われるだろうということだ
僕が芝生を刈っていたのは18か19の頃だからもう結構昔の話になる

[05:33.00]その頃僕には同い年の恋人がいたが彼女はちょっとした事情があってずっと遠く
の街に住んでいた

[05:42.00]我々が会えるのは1年に全部で2週間くらいのものであった我々はその間にセッ
クスをしたり映画を見たり割に贅沢な食事をしたり次から次へととりとめのない話をしたり
した
そして最後には必ず派手な喧嘩をし仲直りをしましたセックスをした

[06:07.00]要するに世間一般の恋人たちがやっていることを短縮版の映画みたいな感じで
バタバタとやっていたわけだ

[06:17.00]僕が彼女を本当に好きだったのかどうかこれは今となってはよくわからない
思い出すことは出来るが分からないのだ

[06:28.00]僕は彼女と食事をするのが好きだったし彼女が一枚ずつ服を脱いでいくのを見
るのが好きだったし彼女の柔らかい体の中に入るのも好きだった

[06:40.00]セックスの後彼女が僕の胸に顔をつけてしゃべったり眠ったりするのを眺め
るのも好きだった
でも僕にわかるのはそれだけだった

[06:55.00]僕にはそこから先のことをきちんと考えることができなかった
彼女と会う何週間を除けば僕の人生は恐ろしく単調なものだった

[07:08.00]適当に大学に顔を出して講義を受けなんとか人並みの単位は取ったそれから一
人で映画を見たり訳もなく街をぶらぶらしたりした
人に仲のいい女友だちがいた

[07:23.00]彼女には恋人がいたが
僕らはよく二人でどこかに行っているんな話をした
一人でいる時はロックンロールのレコードばかり聞いていた

[07:37.00]幸せなような気もしたし幸せなような気もした
でもあの頃ってみんなそういうものだ

[07:47.00]ある夏の朝7月の初め恋人から長い手紙が届いてそこには僕と別れたいと書い
てあったあなたのことはずっと好きだし今でも好きだしこれからも云々

[08:04.00]要するに別れたいということだ

新しいボーイフレンドができたのだ

[08:11.00]僕は首を振ってタバコを6本吸い外に出て缶ビールを飲み部屋に戻ってまたタバコを吸った

それから机の上にある HB の長い鉛筆の事故3本折った

[08:28.00]別に腹を立てたわけじゃない

何をすればいいのかよくわからなかっただけだ

そして服を着替えて仕事に出かけた

[08:40.00]それからしばらくの間僕は周りのみんなから最近随分明るくなったねと言われた人生というのはよくわからない

[08:53.00]僕はその年芝刈りのアルバイトをしていた芝刈り会社は小田急線の経堂駅の近くにあって結構繁盛していた

[09:05.00]大抵の人間は家を建てると庭に芝生を植える

あるいは犬を飼うこれは条件反射みたいなものが

一度に両方いる人もいる

[09:20.00]それはそれで悪くない芝生の緑は綺麗だし犬は可愛い

[09:26.00]しかし半年ばかりするとみんな少しうんざりし始める芝生分からなくてはならないし犬は散歩させなくてはならないのだなかなかうまくいかない

[09:40.00]まあとにかく我々はそんな人々のために芝生を買った僕はその前の年の夏大学の学生課で仕事を見つけた

[09:52.00]僕の他にも何人か一緒に入った連中もいたがみんなすぐに辞めてしまって僕だけが残った仕事はきつかったが給料は悪くなかったそれにあまり他人と口を聞かなくて済む僕も気だ

[10:11.00]僕はそこに勤めて以来少しまとまった額の金を稼いでいた夏に恋人とどこかに旅行するための資金にするつもりだった

[10:23.00]彼女と別れてしまった今となっては旅行も何もない僕は別れの手紙を受け取ってから一週間くらいその金の使い道をあれこれと考えてみた

というより金の使い道くらいしか考えるべきことはなかった

[10:44.00]なんだか訳のわからない一週間だった僕の体は他人の体みたいに見えた

[10:52.00]自分の手や顔やテニスやそんな何もかもが自分のものには見えなかった

僕は僕とは別の人間が彼女を抱いているところを想像してみた

[11:07.00]誰かが彼女の小さな乳首をそっと噛んでいるのだ

なんだかすごく変なきましたまるで自分がなくなってしまったみたいだ

金の使い道はどうとう思いつけなかった

[11:23.00]誰かから中古車を買わないかという話もあった

かなり距離を走っていたが物は悪くなかったし値段も手頃だったでもなぜか気が進まなかった

[11:37.00]ステレオ装置のスピーカーを大きなものに買い替えることも考えたが僕の小さな木造アパートでは無理な相談だった

[11:46.00]アパートを引っ越しても良かったが引っ越すわけがなかったアパートを引っ越してしまうとスピーカーを買い換えるだけの金は残らないのだ金の使い道はなかった

[12:01.00]夏物のポロシャツを1枚とレコードを何枚か買ったただけであとはまるまる残ったそれから性能の良いソニーのトランジスタラジオなかった

[12:14.00]大きなスピーカーが付いていて FM がとても綺麗に入る

[12:21.00] この一週間が経った後で僕は一つの事実に気づいたつまり金の使い道がないのでこれ以上使い道のない金を稼ぐのも無意味だ

[12:35.00] 僕はある朝芝刈り会社の社長に仕事を辞めたいんですがと言ったそろそろ試験勉強も始めなくちゃいけないしその前にちょっと旅行したいんです

[12:50.00] まさかこれ以上もう金はいらないなんて言えない

そうかそうかそれは残念だな

土佐町は本当に残念そうに言った

[13:04.00] それから溜息をついて椅子に座りタバコをふかした顔を天井に向けてコリコリと首を回したあんたは本当にとてもよくやってくれたよ

[13:19.00] アルバイトの中じゃ一番の古株だしお得意先の評判もいいしなまあ若いのに似合わずよくやってくれたよ

[13:31.00] どうも僕は言った実際に僕はすごく評判が良かった丁寧な仕事をしたせよ大抵のアルバイトは大型の電動芝刈り機でザット芝を刈ると残りの部分はかなりいい加減にやってしまう

[13:51.00] それなら時間も早く済むし体も疲れない

僕のやり方は全く逆だ機会はいいい加減に使ってて仕事に時間をかける

[14:05.00] 趣味の細かい部分はきちんとやる当然仕上がりはきれいになるただし上がりは少ない

一件いくらという給料計算だからだ

[14:20.00] 庭の大体の面積で値段が決まる

それからずっとかがんで仕事をするものだから腰がすごく痛くなる

これは実際にあった人じゃなくちゃわからない

[14:34.00] 慣れるまでは階段の上り下りにも不自由するくらいだ

僕は別に評判を良くするためにこんなに丁寧な仕事をしたわけではない

信じてもらえないかもしれないけれど

[14:49.00] ただ単に芝生を刈るのが好きだったのだ

毎朝芝刈りバサミ御伽芝刈り機を積んだライトバンで得意先に行き芝を刈る

[15:02.00] いろんな庭がありいろんな芝がありいろんな奥さんがいる

おとなしい親切の奥さんもいればけんどんな人もいる

[15:15.00] ノーブラにゆったりした T シャツを着て芝を刈る僕の前にかがみこみ乳首まで見せてくれる若い奥さんだっている

とにかく僕は千葉を借り続けた

[15:29.00] 最低の庭の芝はたっぷりと伸びている

まるで草むらみみたいだ

芝が伸びていればいるほどやりがいはあった仕事が終わった後で庭の印象ががらりと変わってしまうのだこれはすごく素敵なサンダルで厚い雲はさっと引いて太陽の光が辺りに満ちたような感じがする

[15:59.00] 一度だけ奥さんの一人と寝たことがある31日にそれくらいの歳の人があった

彼女は小柄で小さな硬い乳房を持っていた

[16:14.00] 雨戸を全部閉め電灯を消すと真っ暗な部屋の中で我々は交わった

彼女はワンピースを着たまま下着を取り僕の上に乗った

胸から下は僕に触れさせなかった

[16:30.00] 彼女の体は嫌にひやりとしては2なだけが暖かかった

彼女はほとんど口をきかなかった

僕も黙っていた

[16:42.00]ワンピースの裾がさらさらと音を立てそれが遅くなったり早くなったりした
途中で一度電話のベルが鳴った

Dell は1月になってからやん

[16:59.00]後になって僕が恋人と別れることになったのはその時のせいじゃないかなとふ
と思ったりもした

別にそう考えなければいけない理由があったわけではないなんとなくそう思っただけだ

[17:15.00]答えられなかった電話のベルのせいだ

でもまあそれは終わったことだ

でも困ったな

[17:27.00]と社長は言った

あんたが今抜けちゃうと予約がこなせないよ一番忙しい時期だしね

梅雨のせいでシワがすっかり伸びているのだ

[17:43.00]どうだろうあと一週間だけやってくれないかな

一週間あれば人でも入るしなんとかやれると思うんだ

[17:54.00]もしあと一週間だけ延長して行ってくれたら特別にボーナスを出すよ

[18:02.00]いいですよと僕は言った

さしあたって特にこれといった予定もないし第一仕事自体が嫌いなわけではないのだそれに
しても変なものだなと僕は思った金なんていらなと思った途端に金が入ってくる

[18:25.00]3日晴れが続き一日雨が降りまた3日晴れた

そんな風にして最後の一週間が過ぎた夏だった

[18:38.00]それも惚れ惚れするような見事なだった空にはキリッとした白い雲が浮かんで
いた太陽はジリジリと肌を焼いた

[18:52.00]僕の背中の中の皮は綺麗に3回抜けもう真っ黒になっていた

耳の後ろまで真っ黒だった

[19:04.00]最後の仕事の朝僕は T シャツとショートパンツテニスシューズにサングラス
という格好でライトバンに乗り込み僕にとっての最後の2割向かった

[19:18.00]車のラジオが壊れていたので家から持ってきたトランジスタラジオでロックン
ロールを聴きながら車を運転した

[19:29.00]クリーデンスとかグランドファンクとかそんな感じだ

すべてが夏の太陽を中心に回っていた

[19:39.00]僕は細切りに口笛を吹き口笛を吹いていない時はタバコを吸った

前のニュースアナウンサーは奇妙なイントネーションをつけたベトナムの地名を連発してい
た

[19:56.00]僕の最後の仕事場はよみうりランドの近くにあった

やれやれ

なんだって神奈川県の間が世田谷の芝刈りサービスを呼ばなきゃいけないんだ

[20:09.00]でもフレについて文句を言う権利は僕にはなかった

何故なら僕は自分でその仕事を選んだからだ

[20:19.00]朝会社に行くと黒板にその日の仕事場が全部書いてあって命令が好きな場所を
選ぶ

大抵の連中は近い場所をとる

[20:31.00] 往復の時間がかからないしそのぶん数がこなせるのが
僕は逆になるべく遠くの仕事場を取る
いつもそうだ

それについてはみんな不思議だった

[20:47.00] 前にも言ったように僕はアルバイトの中では一番古株だし
好きな仕事を最初を選ぶ権利があるからだ
別に大した理由はない

遠くまで行くのは好きなのが

[21:03.00] 遠くの庭で遠くの芝生を刈るのが好きなのだ

[21:08.00] 遠くの道の遠くの風景を眺めるのが好きなのだでもそんなふうに説明したって
多分誰もわかってくれないだろ

[21:21.00] 僕は車の窓を全部開けて運転した都会を離れるにつれて風が涼しくなり緑が鮮
やかになっていった

[21:31.00] 草いきれと乾いた土の匂いが強くなり
空と雲の境目がくっきりとした一本の線になった
素晴らしい展示だった

[21:45.00] 女の子と二人で夏の小旅行に出かけるには最高の日和だ
僕はヒヤリとした海と熱い砂浜のことを考えた

[21:57.00] それからエアコンディショナーの効いた小さな部屋とパリッとしたブルーのシ
ーツのことを考えた
それだけだった

それ以外には何も考えつかなかった

[22:13.00] 砂浜とブルーのシーツが交互に頭に浮かんだ
ガソリンスタンドでタンクをいっぱいにしての間も同じことを考えていた

[22:27.00] 僕はスタンドの横の草むらに寝転んでサービス係がオイルをチェックしたり窓
を拭いたりするのをぼんやり眺めていた
地面に耳をつけるといろんな音が聞こえた

[22:43.00] 遠い波のような音も聞こえた

でももちろんそれは波の音なんかじゃない地面に吸い込まれた音が色々と混ざり合っただけ
なのだ

[22:56.00] 目の前の草の葉を小さな虫が歩いていた
羽の生えた小さな緑色の虫だ

[23:06.00] にしわさの先端まで行くとしばらく迷ってから同じ道を後戻りして言った
別に特にながかりしたようにも見えなかった

[23:19.00] 10分ばかりで給油が終わった
サービス係が車の方を鳴らして僕にそれを知らせた

[23:30.00] 目的の家は丘の中腹にあった
穏やかで上品なおかだ

曲がりくねった道の両脇にはケヤキの並木が続いていた

[23:44.00] どこかの家の庭では小さな男の子が二人裸になってホースの水を掛け合ってい
た

それに向けた飛沫が50 CM くらいの小さな虹を作っていた

[23:59.00] 誰かが窓を開けたままピアノの練習をしていた

ランチを食べに辿っていくと家は簡単に見つかった

[24:10.00]僕は家の前にライトバンを取ればベルを鳴らした返事はなかった周りは恐ろしく身としていた

[24:23.00]人の姿もない僕はもう一度ベルを鳴らしたそしてじっと返事を待ったこじんまりとした感じの良い家だった

[24:37.00]クリーム色のモルタル作りで屋根の真ん中から同じ色の四角い煙突が出ていた窓枠はグレーで白いカーテンがかかってきた

[24:51.00]どちらもたっぷりと火に焼かれて変色していた

古い家だが古さがとてもよく似合っていた

一つに行くとよくこういう感じの家がある

[25:06.00]半年だけ人が住み半年は空き家になっている

そんな雰囲気だった

何かの加減で建物から生活の匂いが散らされてしまっているのだ

[25:22.00]フランス積みのレンガの塀は腰までの高さしかなくその上はバラの垣根になっていた

[25:30.00]バラの花はすっかり落ちて緑の葉がまぶしい夏の光をいっぱいを受けていた

[25:38.00]芝生の様子までは見えなかったか2話は結構広く大きな楠がクリーム色の壁に涼しげな影を落としていた

[25:50.00]3度目のベルを鳴らした時玄関のドアがゆっくりと開いて中年の女が現れた恐ろしく大きな女だった

[26:01.00]僕も決して小柄なほうではないのだが彼女の方が僕より3センチは戦っ

[26:08.00]肩幅を広くまるで何かに腹を立てているみたいに見えた

土地はおそらく50前後というところだ

[26:19.00]美人ではないにしても顔つきは男性だった最も端正とは言っても人が好感を抱くようなタイプの顔ではない濃い眉と四角い顎は言い出したら後には引かないという強情さをうかがわせた

[26:39.00]彼女は眠そうなトロンとした目で面倒くさそうに僕を見た

[26:45.00]白髪が僅かに混じった硬い髪が頭の上で波打茶色い木綿のワンピースの方が口からはがっしりとした日本の腕がだらん

俺は真っ白だった

[27:04.00]茄子を借りに来ました

と僕は言った

それからサングラスを外した

芝生

と言って彼女は首をひねった

電話を頂きましたので

ああそうだ

芝生だ

今日は何日だっけ

14日です

[27:34.00]そうか

[27:37.00]14日か

それからもう一度あくびをした

まるで

[27:45.00]1月ぐらい眠っていたみたいだった

ところでタバコ持ってる僕はポケットからショートホープを出して彼女に私マッチで火をつけてやった

[28:01.00]彼女は気持ち良さそうに空に向けてフット煙を吐いたどれくらいかかると彼女は聞いた

[28:12.00]時間ですか彼女はずっと前に出して顔いた広郷程度によりますね再検していいですか

[28:24.00]第一見なきゃやれないだろ

僕は彼女の後をついて庭に回った庭は平べったい長方形で60坪ほどの広さだった

[28:39.00]ガクアジサイの茂みがあり楠が1分あとは芝生だ

窓の下に空っぽの鳥かごが二つ放り出されていた

[28:52.00]庭の手入れは行き届いていて芝生はたいして狩る必要もないくらい短かった

僕はちょっとがっかりした

これならあと2週間は持ちますよ

と僕は言った

[29:07.00]女は短く鼻を鳴らした

もっと短くして欲しいんだよそのために金を払うんだ

別に私がいいって言うんだからいいじゃない

[29:21.00]僕はちょっと彼女を見たまあ確かにその通りだ

僕は顔いて頭の中で時間を計算してみた4時間というところですね

[29:35.00]えらくゆっくりだね

もしよかったらゆっくりやりたいんですと僕は言ったマー君と彼女は言った

[29:50.00]僕はライトバンから電動芝刈り機と芝刈りバサミと熊手とゴミ袋とアイスコーヒーを入れた魔法瓶とトランジスタラジオを出して岩に運んだ

[30:06.00]太陽はどんどん中空に近づき気温はどんどん上がっていった

僕が道具を運んでいる間彼女は玄関に靴を10足ばかり並べてボロ布で埃を払っていた

[30:22.00]靴は全部女物で小さなサイズと特大のサイズの2種類だった

仕事をしている間音楽をかけて構いませんかと僕は尋ねてみた

[30:37.00]彼女が屈んだまま僕を見上げた

音楽は好きだよ

僕は最初に庭に落ちている小石を片付けそれから芝刈り機をかけた

[30:51.00]石を巻き込むと葉が傷んでしまうのが芝刈り機の前にはプラスチックのカゴが付いていて買った芝は全部そこに入るようになって

[31:05.00]かごがいっぱいになるとそれを取り外してゴミ袋に捨てた

庭が60坪もあると短い側でも結構な量を狩ることになる

[31:19.00]太陽はじりじりと照りつけた

僕は汗で濡れた T シャツを脱ぎショートパンツ一枚になった

まるで体裁の良いバーベキューみたいな感じだ

[31:33.00]こんな風にしてるとどれだけ水を飲んでも小便なんか一滴も出ない

全部汗になってしまうのだ

[31:43.00]1時間ほど芝刈り機をかけてから一休みして

楠の鍵に座ってアイスコーヒーを飲んだ糖分が体の隅々に染み込んでいった

[31:57.00] 頭上では蝉が鳴き続けていた

ラジオのスイッチを入れダイヤルを回して適当なディスクジョッキーを探した

[32:08.00] スリッドッグナイトのママトールドミーが出てきた所でダイヤルを止め
仰向けに寝転んでサングラスを通して木の枝とその間から漏れてくる日の光を眺めた

[32:23.00] 彼女がやってきて僕のそばに立った

下から見上げると彼女は楠みたいに見えた

彼女は右手にグラスを持っていた

[32:36.00] グラスの中には氷とウイスキーらしきものが入っていてそれが夏の光にチリチリと揺れていた

[32:49.00] と彼女は言った

そうですね

と僕は言った

昼飯はどうすると彼女は言った

僕は腕時計を見た

11時20分だった

[33:05.00] 12時になったらどこかに食べに行きます近くにハンバーガースタンドがありましたからわざわざ行くことはないサンドイッチでも作ってあげるよ

本当にいいんです

[33:20.00] いつもどこかに食べに行ってますから

彼女はウイスキーグラスを持ち上げて一口で半分ばかり飲んだ

それから口をすぼめて息を吐いた

[33:35.00] どうせ自分のぶんだけ作るんだそのついでだよ

嫌なら無理には作らないけどね

じゃあいいただきますどうもありがとう

[33:49.00] 彼女は何も言わずに顎を少し前に突き出した

それからゆっくりと肩を揺すりながら家の中に引き上げていった

[34:01.00] 12時までハサミで芝を刈った

まず機械で買った部分の村お揃い

それを熊手でかき集めてから今度は機械でかれなかった部分を狩る

木の長い仕事だ

[34:18.00] 適当にやろうと思えば適当にやれるしきちんとやろうと思えばいくらでもきちんとやれる

しかしきちんとやったからそれだけ評価されるかというところが限らない

[34:34.00] ぐずぐずやっていると見られることもある

それでも前に言ったようにかなり僕はきちんとやる

[34:43.00] これは性格の問題だ

それから多分プライドの問題だ

12時のサイレンがどこかでナルト

[34:54.00] 彼女は僕を台所にあげてサンドイッチを出してくれた

[35:01.00] それほど広くはないけれどさっぱりとした清潔な台所だった

余計な飾り付けは何もなかった

シンプルで機能的な台所だった

[35:16.00] 電気器具はどれも古い形のものだった

懐かしいと言ってもいいくらいだった

まるでどこかで時代が止まってしまったようにも感じられた

[35:30.00] 巨大な冷蔵庫がブーンという音を立てて歌っているのを別にすれば辺りはとても静かだった食器にもスプーンにも影のような静けさが染み込んでいた

[35:46.00] 彼女はビールを勧めてくれたら僕は工作中だからといって断った
彼女が代わりにオレンジジュースを出してくれた

ビールは彼女が自分で飲んだ

[36:01.00] テーブルの上には半分に減ったホワイトホースの便もあった
流しの下にはいろんな種類のから瓶が転がっていた

[36:13.00] 彼女の作ってくれたハムとレタスときゅうりのサンドイッチは見た目よりずっと
うまかった

とても美味しいです

と僕は言った

[36:26.00] サンドイッチを作るのは昔から甘いんだよと彼女は言った
それ以外のものは駄目だけどサンドイッチは甘いんだ

[36:37.00] 死んだ亭主はアメリカ人です

毎日サンドイッチを食べてた

サンドイッチを食べさせておけばそれで満足してた

[36:49.00] 彼女自身はそのサンドイッチを一切れも食べなかった

ピクルスをふたつかじっただけで後はずっとビールを飲んでた

あまりうまそうには飲まなかった

[37:02.00] 仕方ないから飲んでいるという風だった

我々は食卓を挟んでサンドイッチを食べビールを飲んだ

[37:12.00] しかし彼女はそれ以上のことは何も話さなかったし僕の方にも話すことはなかった

12時半に僕は芝生に戻った

最後の芝生だ

[37:28.00] これだけ買ってしまえばもう芝生と亜鉛がなくなる

僕はペンのロックンロールを聞きながら芝生を丁寧に刈り揃えた

[37:40.00] 何度も熊手で買った芝を払いよく床屋があるようにいろんな角度から刈り残しがないか点検した

1時半までに2/3が終わった

[37:55.00] 汗が何度も目に入りその度に庭の水道で顔を洗った

特に理由もなくなんとかペニス勃起しそして治った

[38:08.00] 千葉を借りながら勃起するなんてなんだか馬鹿げている

2時20分に仕事は終わった

僕はラジオを消し裸足になって芝の上をぐるりとまわってみた

[38:24.00] 満足のいく出来だった

刈り残しもないしむらもない

絨毯のようになめらかな

僕は目を閉じて大きく息を吸い込んだ

[38:37.00] そして足の裏のそのひやりとした緑色の感触をしばらくの間楽しんだ

でもそのうちに体の力が突然ふっと抜けてしまった

[38:52.00] あなたのことは今でもとても好きです
と彼女は最後の手紙に書いていた
優しくとても立派な人だと思っています
これは嘘じゃありません

[39:07.00] でもある時それだけじゃ足りないんじゃないかという気がしたんです
どうしてそんなふうにしたのか私にも分かりません
それにひどい言い方だと思いま

[39:21.00] たぶん何の説明にもならないでしょ
ジュークというのはとても嫌な年齢です
あと何年か経ったらもっと上手く説明できるかもしれない

[39:35.00] でも何年かたった後では多分説明する必要もなくなってしまうんでしょうね

[39:44.00] 僕は水道で顔を洗い道具をライトバンに運び新しい T シャツを着た
そして玄関のドアを開けて仕事が終わったことを知らせた

[39:58.00] ビールでも飲めば
と彼女は言った

ありがとうと僕は言った
ビールぐらい飲んだっていいだろ

[40:10.00] 我々は庭先に並んで芝生を眺めた
僕はビールを飲み彼女は細長いグラスでレモンの木のウォッカトニックを飲んでいた

[40:24.00] 栄がよくおまけにくれるようなクラスだった
セミはまだ泣き続けていた

彼女は少しも酔っ払ったようには見えなかつ

[40:36.00] 行きだけが少し不自然だった
吸うという歯の間から漏れるようないきだ

[40:46.00] こうしている今にも彼女が意識を失ってぼったりと芝生の上に倒れてそのまま
死んでしまうのではないかという気がした

[40:57.00] 僕は彼女が倒れるところを頭の中で想像してみた
多分まっすぐにバタンと倒れるんだろうなと僕は思った

[41:11.00] あんたはいい仕事をするよと彼女は言った特に面白くもないという感じの声だ
ったがそれは別に何かを責めているわけではない

[41:26.00] これまでいるんな芝生やよよんだけど
こんなにきちんとやってくれたのは
あんたが初めてだ

どうも
と僕は言った

[41:40.00] 死んだ亭主が芝生にうるさくてね
いつも自分できちんと買ってたよ
あんたの借り方と似てるよ

[41:52.00] 僕はタバコを出して彼女にすすめ
二人でタバコを吸った

彼女の手は僕の手よりも大きかった
そして石のように硬いそうだった

[42:07.00] 右手のグラスも左手のショートホープもとても小さく見えた

指は太く指輪もない

俺にははっきりとした縦の線が何本か入って

[42:24.00]亭主は休みになると芝生ばかり買ってたよそれほどエンジンってわけでもなかったんだけどね

僕はこの女の夫のことを少し想像してみた

[42:40.00]うまく想像できなかった

楠の夫婦を想像できないのと同じことだ

彼女はまたずっと息を吐いた

[42:53.00]天使が死んでからは

どんなは言った

ずっと業者に来てもらってたんだよ

私は太陽に弱いし娘は日焼けを嫌がるか

[43:07.00]日焼けは別にしたって若い女の子が芝刈りなんてやるわけないけどね

僕は頷いた

でもあなたの仕事っぷりは気に入ったよ

[43:23.00]芝生ってのはこういう風に帰るもんだ

同じ彼にしても気持ちってもんがある

気持ちがなかったら

それはただの

[43:37.00]彼女は次の言葉を探したが言葉は出てこなかった

その代わりゲップをした

僕はもう一度芝生を眺めた

それは僕の最後の仕事だったのだ

[43:53.00]そして僕はそのことがなんとなく悲しかった

[43:58.00]その悲しみの中には別れたガールフレンドのことも含まれていた

この芝生を最後に彼女との間の感情ももう消えてしまうんだなと僕は思った

[44:13.00]僕は彼女の裸の体のこと思い出した

楠のような女がもう一度げっぽうしたそして自分ですごく嫌な顔をした

[44:28.00]来月もまた来なよ

来月はダメなんです

と僕は言った

どうしてと彼女は言った今日が仕事の最後なんです

[44:42.00]と僕は言った

そろそろ学生に戻って勉強しないと単位が危なくなっちゃうものですから

[44:52.00]彼女はしばらく僕の顔を見てから足元を眺めそれからまた顔を見た

学生なのかい

えーと僕は言った

どこの学校

[45:07.00]僕は大学の名前を言った

大学の名前は別に彼女に大した感動を与えなかった

特に感動は大量の大学ではないのだ

[45:20.00]彼女は人差し指で耳の後ろを書いたもうこの仕事はやらないんだね

今年の夏はねと僕は言った

[45:34.00] 今年の夏はもう芝刈りはやらない
来年の夏もそして再来年の夏も

[45:44.00] 彼女はうがいでもするみたいにウォッカトニックをしばらく口に含みそれから
愛おしそうに半分ずつ2回に分けて飲みました
汗が顔いっぱい吹き出していた

[46:00.00] 小さな虫が肌に張り付いているみたいに見えた
中に入んなよ

どんな歌
外は暑すぎるよ

[46:13.00] 僕は腕時計を見た
2時35分

遅いのか早いのかよくわからな

[46:22.00] 仕事はもう全部終わっていた
明日からはもう一センチたって芝生分からなくていいのだ
とても妙な気持ちだ

[46:34.00] 急いでんのかい

どんな型釣れた

僕は首を振った

じゃあ家に上がって冷たいものでも飲んできな

大して時間は取らないよ

[46:48.00] それにあんたにちょっと見て欲しいものがあるんだ
見て欲しいもの

[46:56.00] でも僕には迷う余裕なんてなかった

彼女は先に立ってスタスタと歩き出した

僕の方を振り返りもしなかった

[47:08.00] 僕は仕方なく彼女の後を追った

暑さで頭がぼんやりしていた

[47:17.00] 家の中は相変わらず神としていた

夏の午後の光の洪水の中から突然屋内に入ると瞼の奥がチクチク痛んだ

[47:30.00] 家の中には水で溶いたような淡い闇が漂っていた

[47:37.00] 何十年も前からそこに住み着いてしまっているような感じの闇だ

別に特に暗いというわけではなく淡い闇だった

空気は涼しかった

[47:51.00] エアコンディショナーの涼しさではなく空気の動いている涼しさだった

どこからか風が入ってどこかに抜けて行くの

[48:02.00] こっちだよ

と彼女は言ってまっすぐな廊下をパタパタと音を立てて歩いた

廊下にはいくつか窓がついていたが

[48:16.00] インカの石冷凍育ちすぎた楠の枝が光を遮っていた

[48:24.00] 廊下には色んな匂いがした

どの匂いも覚えのある匂いだった時間が作り出す匂いだ

[48:35.00] 時間が作り出しそしてまたいつか時間が消し去っていく匂いです古い洋服や古
い家具や古い本や古い生活の匂いだ

[48:50.00]廊下の突き当たりに階段があった
彼女は後ろを向いて僕がついてきていることを確かめてから階段を上った

[49:01.00]彼女が一段上がるごとに古い木材がミシミシと音を立てた
階段を上るとやっと光が差ししていた

[49:14.00]踊り場についた窓にはカーテンもなく夏の太陽が床の上に光のプールを作っていた

[49:23.00]2階には部屋は二つしかない一つは何度でもう一つがきちんとした部屋だった
結んだ薄いグリーン doa に小さなすりガラスの窓がついている

[49:38.00]グリーン of ペンキは少しひび割れ真鍮 of ノブは取っ手の部分だけが白く変色していた

[49:48.00]彼女は口をすぼめてふうと息を吐くと
ほとんど空になったウォッカ of ニック of グラスを窓枠に置きワンピース of ポケットから鍵 of 束を出しをおきな音を立ててドア of 鍵を開け

[50:05.00]あいなよと彼女は言った
我々は部屋に入った
中は真っ暗でムツとしていた
熱い空気がこもっている

[50:19.00]締め切った窓 of 隙間から銀神みたいに平べったい光が幾筋か部屋の中に差し込んでいた
何も見えなかった

[50:31.00]ちらちらと地理が浮かんでいるのが見えるだけだった
彼女はカーテンを払ってガラス戸を開けがらと雨戸を引いた

[50:43.00]なぜしっかりと涼しいランプが一瞬のうちに部屋にあふれた部屋は典型的なティーンエージャー of 女の子 of 部屋だった

[50:56.00]窓際に勉強机がありその反対側に小さな木 of ベッドがあった
ベッドにはシワひとつないコーラルブルー of シーツがかかっている同じ色 of 枕が置いてあった

[51:12.00]足元には毛布が1枚頼んであるベッド of 横には洋服ダンスとドレッサーがあった
ドレッサーの前には化粧品がいくつか並んでいた

[51:26.00]ヘアブラシとか小さなハサミとか口紅とかコンパクトとかそういったものが特に熱心に化粧をするというタイプではないようだ

[51:40.00]机の上にはノートや辞書があったフランス語 of 辞書で英語 of 耳座った

[51:48.00]かなり使い込まれているように見えるそれも乱暴な使われ方ではなくきちんとした使い方だった10皿には一通りの頭を揃えて並べられていた

[52:04.00]消しゴムは片側だけが丸く減っていたそれから目覚まし時計と電気スタンドとガラス of 文鎮
どれも簡素なものだった

[52:19.00]昨日家でにわたりの原則が5枚と数字だけのカレンダーがかかっていた
机の上に指を走らせてみると指が埃で白くなった
一か月文くらい残りだ

[52:35.00]カレンダー of 6月 of ものだった

[52:39.00]全体としてみれば部屋はこの年頃の女の子にしてはさっぱりしたものだった
ぬいぐるみもなければ

ロックシンガーの写真もない

[52:52.00] けばけばしい飾り付けもなければ花花柄のゴミ箱もない作り付けの本棚には
いろんな本が並んでいた

文学全集があった

[53:04.00] 刺繍があったり映画雑誌があったり映画10のパンフレットがあったりした
英語のペーパーバックも何冊か並んでいた

[53:16.00] 僕はこの部屋の持ち主の姿を想像してみたがうまくいかなかった
別れた恋人の顔しか浮かんでこなかった

[53:27.00] 大柄の中年の女はベッドに腰を下ろしたのはじっと僕を見ていた
彼女は僕の視点をずっと追っていたが何かまったく別のことを考えているように見えた

[53:41.00] 女が僕の方を向いているというだけで本当は何も見えていなかった

[53:48.00] 僕は机の椅子に座って彼女の後ろの漆喰の壁を眺めた

彼には何もかかっていなかった

ただの白い壁だった

[54:00.00] じっと壁を眺めているとそれは上の方で手前に傾いているように見えた
今にも彼女の頭上に崩れかかってくるような感じだった

でももちろんそんなことはない

[54:15.00] 光線の加減でそんな風に見えるだけだ

[54:20.00] 何か飲まないかと彼女は言った僕は断った

遠慮しなくたっていいんだよ別に取って来やしないんだから

[54:31.00] じゃあ同じものを薄くしてください

土木は行って彼女のおっぱとニックを指差した

彼女は5分後にウォッカトニックを2杯と灰皿を持って戻ってきた

[54:46.00] 僕は自分のウォッカトニックを一口飲んだ全然薄くなかった

僕は氷が溶けるのを待ちながらタバコを吸った

彼女はベッドに座って

[54:59.00] おそらくは僕のよりずっとこいウォッカトニックをちびちびと飲んでいて
時々コリコリという音を立てて氷をかじった

[55:12.00] 体が丈夫なんだと彼女は言った

だから酔っ払わないんだ

僕は曖昧に頷いた

僕の父親もそうだった

[55:25.00] でもアルコールと競争して買った人間はいない

自分の花が水面の下に隠れてしまうまでいるんなことに気がつかないというだけの話なのだ

[55:38.00] 父親は僕が16の年に死んだ

とてもあっさりとした死に方だった

生きていたかどうかさえうまく思い出せないくらいあっさりした死に方だった

[55:52.00] 彼女はずっと黙っていたグラスを揺するたびに氷の音がした

開いた窓から時々涼しい風が入った

[56:04.00] 風は南の方から別の丘を越えてやってきた

このまま眠ってしまいたくなるような静かな夏の午後だ

どこか遠くで電話のベルが鳴っていた

[56:20.00] 洋服ダンスを開けてみなよ

と彼女が言った

僕は洋服ダンスの前まで行って言われた通り両開きのドアを開けた

[56:32.00] タンスの中にはぎっしりと服が吊るされていた

漫画 ONE PIECE であとの半分がスカートやブラウスやジャケットだった
全部夏物だ

古いものもあればほとんどそこでの頭されていないものもあった

[56:53.00] スカート丈は大部分がミニだ

趣味もものも悪くなかった

特に瞳に着くというわけではないけれどとても感じがいい

[57:06.00] これだけ服が揃っていれば一夏デートの度に違った服装ができる

しばらく洋服の列を眺めてから僕はドアを閉めた

[57:17.00] 素敵ですねと僕は言った引き出しもあげてみなよと彼女は言った

[57:25.00]僕はちょっと迷ったが諦めて洋服ダンスについての引き出しを一つずつ開けてみた女の子の留守中に部屋を引っ掻き回すことがまともな行為だとはとても思えなかったが逆らうのもまた面倒だった

[57:45.00]朝の11時から酒を飲んでいる人間が何を考えているかなんて僕には分からない

[57:53.00]一番上の大きな引き出しには T シャツが入っていた選択されきちんと折りたたまれ

[58:07.00]2段目にはハンドバッグやベルトやハンカチやブレスレットが入っていた布の帽子もいくつかある

三代目には下着と靴下が入っていた

[58:22.00]何もかもが清潔できちんとしていた僕は大きな理由もなく悲しい気分になった
なんだかちょっと胸が重たくなるような感じだった

[58:37.00]それから引き出しを閉めて

女はベッドに腰掛けたまま窓の外の風景を眺めていた

ミニ手に持ったウォッカトニックのグラスはほとんど空になっていた

[58:52.00]僕は椅子に戻って新しいタバコに火をつけた窓の外はなだらかな傾斜になっていてその傾斜が終わったあたりからまた別の丘が始まっていた

[59:07.00]緑の起伏がどこまでも続き

そこに張りつくように住宅地が連なっていた

どの家にも庭がありどの庭にも芝生が生えていた

どう思う

[59:22.00]と彼女は窓に目をやったまま入った

彼女についてさ

会ったこともないのに分かりませんよと僕は言った

[59:35.00]服を見れば大抵の女のことは分かるよどんなは言った

僕は恋人のことを考えた

そして彼女がどんな服を着ていたか思い出してみた

[59:50.00]まるで思い出せなかったボクが彼女について思い出せることは全部漠然としたイメージだった

[59:59.00]僕が彼女のスカートを思い出そうとするとブラウスが消え失せ僕が帽子を思い出そうとすると彼女の顔は誰か別の女の子の顔になっていた

[60:11.00] 女半年前のことなのに何一つ思い出せなかった
結局のところ僕は彼女について一体何を知っていたのだろう

[60:23.00] わかりません

土木は繰り返した感じでいいんだよどんなことでもいいよ
ほんのちょっとでも聞かせてくれればいいんだ

[60:36.00] 僕は時間を稼ぐためにウォッカトニックを一口飲んだ氷はほとんど溶けてトニックウォーターは甘い水みたいになっていた

ウォッカの強い臭いが喉元過ぎ胃に降りてぼんやりとした温かみになった
窓から吹き込んだ風が机の上にタバコの白い灰を散らせた

[61:03.00] とても感じのいいきちんとした人みたいですねと僕は言ったあまり押し付けがましくないしかとって性格が弱いわけでもない成績は中の上クラス

[61:18.00] 学校は女子大短大友達はそれほど多くないけれど仲は良い
あってますか

続けなよ

[61:31.00] 僕は手の中でグラスを何度か回してから机に戻した

[61:37.00] それ以上は分かりませんよ

第一今言ったことだってあっているかどうかまるで自信がないんです
大体あってるよ

[61:49.00] と彼女は無表情に言った

大体やってる

彼女の存在が少しずつ部屋の中に忍び込んでいるような気がした

[62:01.00] 彼女はぼんやりとした白い影のようだった顔も手も足も何も無い
光の海が作り出したほんのちょっとした歪みの中に彼女がいた

[62:17.00] 僕はウォッカトニックをもう一口飲んだ

ボーイフレンドはいます

土木は続けた

一人か二人

分からない

[62:31.00] どれほどの中か分からないでもそんなことは別にどうだっていいんです
問題は彼女がいるんなものに馴染めないことです

自分の体やな

[62:47.00] 自分の考えていることや自分の求めていることや他人が要求していること
やら

そんなことにです

そうだね

[63:00.00] しばらくあとで女は言った

あんたの言うことはわかるよ

僕には分からなかった

僕の言葉が意味していることはわかった

[63:15.00] それが誰から誰に向けられたものであるかがわからなかった

僕はとても疲れていて眠りたかった

[63:24.00] 眠ってしまえばいろんなことがはっきりするような気がしたでも正直なところは
はっきりすることが何かの助けになるとも思えない

[63:37.00] それっきり彼女はずっと口をつぐんでいた時も溜まっていた
手持ち無沙汰だったのでウォッカトニックを半分飲んだ

[63:48.00] 風が少し強くなったようだった楠の丸い葉が揺れているのが見えた僕は目を細めるようにしてじっとそれを見ていた

[64:01.00] 沈黙はずいぶん長く続いたがそのことはあまり苦にはならなかった

[64:08.00] 僕は眠ってしまわないように注意しながら楠を眺め僕の体の中に神のように存在している疲れを架空の指先で確認し続けていた

[64:21.00] それは僕の中にありながらしかもずっと遠いどこかにあるもののように感じられた

引き止めて悪かったねどんなは言った

[64:34.00] 芝生がすごく綺麗に借りてたからさ嬉しかったんだよ僕は頷いた
そうだ金を払うよどんなが入ってワンピースのポケットに白い大きな手をつっ込んだ

[64:49.00] いくら代

後でちゃんとした請求書を送ります銀行に振り込んで下さいと僕は言った

女は喉の奥になんとなく不満そうな声を出して

[65:05.00] 我々はまた同じ階段を降りて同じロートの戻り玄関に出た廊下と玄関は行きと同じようにヒヤリとして闇に包まれている

[65:19.00] 子供の頃の夏旭川を裸足でさかのぼっていて大きな鉄橋の下をくぐるときにちょうどこんな感じがした

真っ暗です突然水の温度が下がるそして砂地が奇妙な音縁を切る

[65:39.00] 玄関でテニスシューズを履いてドアを開けた時には本当にほっとした
日の光が僕の周りに溢れ風に緑の匂いがした

[65:51.00] いつか眠そうな音をたてながら垣根の上を飛び回っていた立派なもんだ
どんなは庭の芝生を眺めながらもう一度そういった

[66:06.00] 僕も芝生を眺めた確かにすごく綺麗に書いていた妹と言ってもいいくらいだった

女はポケットから選んだものを引っ張り出して

[66:17.00] その中から浅草になった一万円札を選び分けた
それほど古くないはずだったがとにかくくしゃくしゃだった
15年前の1万円札といえばちょっとしたものが

[66:33.00] 少し迷ったが断らない方がいいような気がしたので受け取ることにした
ありがとう

と僕は言った

女はまだ何か良い足りなそうだった

[66:48.00] どう言えばいいのかよくわからないみたいだった

よくわからないままに右手に持ったグラスを眺めた

グラスは空だった

それでまた僕を見た

[67:03.00] 私ばかりの仕事を始めたら家に電話したよいつだっていいからさ
と僕は言った

[67:13.00] そうします

それからサンドイッチとお酒ごちそうさまでした

彼女は喉の奥でうんともすんともわからないような声を出しそれからぐるりと背を向けて玄

関の方に歩いて行った

[67:33.00]僕は車のエンジンを吹かせラジオのスイッチを入れた

もうとくに3時を回っていた

[67:41.00]途中眠気覚ましにドライブインに入ってコカコーラとスパゲッティを注文した
スパゲッティは白く丸くて半分しか食べられなかったしかしどちらにしても別に腹なんて減
ってはいなかったのだ

[67:59.00]顔色の悪いウエイトレスが食器を下げてしまうと僕はビニールの椅子に座った
ままうとうと眠った

店は空いていたし良い具合にクーラーが効いていた

[68:13.00]とても短い眠りだったので夢なんか見なかった

眠り自体が夢みたいなものだったそれでも目が覚めた時には太陽の光は幾分弱まっていた僕
はもう一杯コーラを飲みさっきもらった一万円札で勘定を払った

[68:34.00]駐車場で車に乗りキーをダッシュボードに乗せたままタバコを一本吸った

[68:41.00]いろんな細々とした光が僕に向かって一度に押し寄せてきた結局のところ僕は
とても疲れていたのではくは運転するのは諦めてシートに沈み込みもう一本タバコを吸った

[68:58.00]何もかもが遠い世界で起こった出来事のような双眼鏡を反対に覗いた時
みたいに人物が嫌に鮮明で不自然だった

[69:12.00]あなたは私にいろんなものを求めているのでしょうかけれどと恋人は書いていた
私は自分が何かを求められているとはどうしても思えないのです

[69:26.00]僕の求めているのはきちんと芝を刈ることだけなんだと僕は思う
最初に機械で芝刈り熊手でかき集めそれから芝刈りバサミできちんと揃える

[69:41.00]それだけなんだ

僕にはそれができる

そうするべきだと感じているから

そうじゃないか

土木は声に出して言ってみた

[69:55.00]返事がなかったから10分後にドライブインのマネージャーが車のそばに行っ
てきて腰をかがめ大丈夫かと尋ねた

少しクラクラしたんです

[70:10.00]暑いからでも持ってきてあげようかありがとうでも本当に大丈夫です僕は駐車
場から車を出し東に向かって走った

[70:23.00]道の両脇にはいろんな家がありいろんな庭がありいろんな人々のいろんな生
活が

[70:33.00]僕はハンドルを握りながらそんな風景をずっと眺めていた

未来では芝刈り機がカタカタという音を立てて揺れていた

[70:45.00]それ以来僕は一度も芝生を飼っていない

いつか芝生のついた家に住むようになった僕はまた芝生を刈るようになるだろう

でもそれはもっとずっと先のことだという気がする

[71:01.00]その時になっても僕はすごくきちんと芝生を刈るに違いない

[71:23.00]再びパン屋を襲う村上春樹

[71:38.00]パン屋を襲った時の話を妻に聞かせたことが正しい選択だったのかどうか今
もって確信が持てない

[71:48.00]たぶんそれは正しいとか正しくないとかいう基準では推し量ることのできな

いもの大人のだろう

[71:58.00]つまり世の中には正しい結果をもたらす正しくない選択もあるし
正しくない結果をもたらす正しい選択もあるということだ

[72:12.00]このような不条理性を回避するには

[72:16.00]我々は実際には何一つとして選択してはいないのだという立場をとる必要があるし

概ね僕はそんな風に考えて暮らしている

[72:29.00]怒ったことはもう怒ったことだし

怒っていないことはまだ起こっていないことなのだ

そのような立場から振り返ると僕はなにはともあれとにかく

[72:44.00]妻にパン屋襲撃のことを話してしまったということにな

[72:50.00]話してしまったことは話してしまったことだしそこから生じた事件はすでに生じてしまった事件なのだ

そしてもしこの事件が人々の目に奇妙に映るとすればその原因は事件を包含する相対的な状況存在の中に求められるべきであろうしかし僕がどんなふう考えたところでそれで何かが変わるわけではない

[73:20.00]僕が妻の前でパン屋襲撃の話を持ち出したのはほんのちょっとした成り行きからだった

[73:28.00]その話を持ち出そうと前もって決めていたわけでもないしその時にふと思い出してそういえば

という風に話し始めたわけでもない

僕自身そのパン屋襲撃という言葉が妻の前で口に出すまで自分がかつてパン屋を襲った事なんてすっかり忘れていたのだ

[73:54.00]その時僕にパン屋襲撃のことを思い出させたのは耐え難いばかりの空腹感だった時刻は夜中の2時前だった

[74:06.00]朴訥のは6時に軽い夕食をとり9時半にはベッドに潜り込んで目を閉じたのだがその時刻にどういいうけか二人とも同時に目を覚ましてしまったのだ

[74:20.00]目を覚ましてしばらくするとオズの魔法使に出てくる竜巻のように空腹感が襲いかかってきた

それは理不尽なまでに圧倒的な空腹感だった

[74:36.00]冷蔵庫の中には食物と呼べそうなものは何一つなかった

フレンチドレッシングと六本の缶ビールと干からびた2個の玉ねぎとバターと脱臭剤

[74:52.00]それだけだ

我々はその2週間ほど前に結婚したばかりです食生活に関する共同認識みたいなものをまだ確立してはいなかった

[75:05.00]確立しなくてはならないものは他に山ほどあったんだ

[75:12.00]その頃僕は法律事務所に勤めており妻はデザインスクールで事務の仕事をして
いた僕は28画のどちらかです彼女は僕より2年8ヶ月と3日年下だった我々の性格はひどく忙しく立体的な洞窟のように前後左右に入り組んでいて

[75:37.00]冷蔵庫の中身まではとても気が回らなかった

我々はベッドを出て台所に移り何をするともなくテーブルを挟んで向かい合っていた

[75:52.00]もう一度眠りにつくには二人とも腹が減りすぎていたしかと言って起きて何かをするにも腹が減りすぎていた

[76:03.00]このような強烈な空腹感がどこからどのようにしてやって来たのか我々には見当もつかなかった

[76:13.00]僕と妻はちょっとしたらと期待して交代で冷蔵庫の扉を何度か開いてみたが何度か開けてみても中身は変化しなかった

[76:26.00]ビールと玉ねぎとバターとドレッシングと脱臭剤だ

[76:36.00]玉ねぎのバター炒めを作るという手もあったが2個の干からびた玉ねぎが我々の空腹を有効に埋めてくれるとも思えなかった

[76:47.00]玉ねぎというのは何かと一緒に口にすべきものであってそれだけで上を満たせる食物ではないのが逆に余計に腹が減るだけかもしれない

[77:01.00]フレンチドレッシングの脱臭剤炒めは
土木は冗談で提案してみたが予想したとおり黙殺された

[77:11.00]車で外に出てオールナイトのレストランを探そうと僕は言った国道に出ればきっとそういうのが何かあるよ

[77:24.00]その僕の提案を拒否した外に出て食事をするのなんて嫌だと彼女は言った

[77:33.00]夜の12時を過ぎてから食事をするために外出するなんて間違ってるわと彼女は言った

[77:44.00]彼女はよくそういう古風な考え方をする確かにそうかもしれないと僕は数秒置いていった

[77:57.00]結婚した当初にはありがちなことなのかもしれないが伴侶のそのような意見はある種の刑事として僕の耳に響いた

[78:08.00]彼女にそう言われると自分の今抱えている木川国道沿いのしゅーやレストランなんかで便宜的に満たされてはならない特殊な気がであるように感じられた

[78:22.00]特殊な飢餓とは何か僕はそれを一つの映像としてここに提示することができる
1

[78:35.00]僕は小さなボートに乗って静かな養生に浮かんでいる

2

下を見下ろすと水の中に海底火山の頂上が見える

[78:51.00]海面とその頂上の間にはそれほどの距離はないように見えるがしかし正確なところは分からない

4

[79:06.00]なぜなら水が透明すぎて距離感がつかめないからだ

[79:14.00]しゅーやレストランになんて行きたくないと言った妻が言ってから僕が確かにそうかもしれないと同意するまでの2秒か3秒の間に僕の頭に浮かんだイメージはおおよそそういうものだった

[79:31.00]僕はもちろんジグムントフロイトではないのでそのイメージが何を意味しているのかを明確に分析することはできなかったがそれが政治的な種類のイメージがあることだけは直感的に理解できた

[79:49.00]だからこそ僕は食事のために外出はしないという彼女のテーゼにほとんど自動的に同意したのだ

仕方なく我々は缶ビールを開けて飲んだ

[80:04.00]つむはビールをそれほどは好まなかったので僕は6本のうちの4本を飲み彼女が残りの2本を飲むことになった

[80:14.00]僕がビールを飲んでいる間彼女は11月のリスのようにこまめに台所の店を探し

回る袋の底にバタークッキーが4枚残っていたのを見つけた冷凍ケーキの台を作った時の残り
りで湿ってすっかり柔らかくなっていたが我々はそれを大事に2枚ずつかじった
[80:41.00]しかし残念ながら缶ビールもバタークッキーの我々の空腹にはきれいさっぱり
何の痕跡も残さなかった
[80:53.00]それらは空から見下ろすシナイ半島みたいに窓の外をただ虚しく通り過ぎてい
っただけだった
[81:04.00]我々はビールのアルミ缶に印刷された子を選んだり時計を何度も眺めたり冷蔵
庫の扉に目をやったり
昨日の夕刊のページ送ったり
[81:16.00]テーブルの上に散らばったクッキーのカツオはがきの縁で集めたりした
時間は魚の腹に飲み込まれた鉛の重りのように暗く鈍重だった
[81:34.00]こんなにお腹が空いたのって初めてだわ
と妻が言った
結婚したと何か関係があるのかしら
どうだろうと僕は言った
[81:50.00]あるのかもしれないしないのかもしれない
[81:56.00]爪が新たなる食物の断片を求めて台所を探し回っている間僕はまたボートから
身を乗り出して海底火山の頂上を見下ろしていた
[82:09.00]ボートを取り囲む海水の透明さは僕の気持ちをひどく不安定なものにしていた
みぞおちの奥にぽっかりと空洞が生じてしまったような気分だった
[82:24.00]出口も入口もない純粋な空洞だ
[82:30.00]その奇妙な体内の欠落感の高い戦闘のてっぺんに登った時に感じる恐怖のしび
れにどこかしら似ていた
[82:41.00]空腹と高所恐怖に相通じるところがあるというのは僕にとっては新しい発見だ
った
[82:50.00]買ってこれと同じような経験をしたことがある
そう思ったのはちょうどその時だった
僕はあの時も今と同じように腹を減らせていたのだ
[83:06.00]あれは
パン屋襲撃の時だ
と僕は思わず口に出した
パン屋襲撃って何のこと
[83:23.00]質問したそのようにしてパン屋襲撃の改装が始まったのだ
[83:33.00]ずっと昔に番屋を襲ったことがあるんだと僕は妻に説明したそれほど大きなパ
ン屋じゃないのあるパン屋でもない特に美味しくもなく特にまずくもない
[83:50.00]どこにでもある平凡な町のパン屋大商店街の真ん中であって親父が一人でパン
を焼いてみっていた
[84:02.00]朝に開いた文が売り切れるとそのまま店を閉めてしまうような小さなパンやだ
[84:10.00]どうしてそんなぱっとしないパン屋を選んで襲ったのと繋が質問した大きな店
を襲う必要がなかったからさ
[84:20.00]我々は飢えを満たしてくれる霊のパンを求めてただけで何も金を取ろうとし
ていたわけじゃない我々は襲撃者であって冒頭ではなかった我々
[84:35.00]と妻は言った我々って誰のことその頃僕には相棒がいたんだ

土木は説明したもう10年も前のことだけど

[84:51.00]二人ともひどい貧乏で歯磨きチューブさんがいなくて毎日歯ブラシだけで歯を磨いていたもちろん食べ物だっていつも不足していた

[85:03.00]だからその当時我々は食べ物を手に入れるために実にいろんなひどいことをやったものかパン屋を襲ったのもそのうちの一つでよく分からないわ

[85:19.00]と妻は言って夜明けの空に色褪せた星の姿を探し求めるような目で僕の顔を覗き込んだどうしてそんなことをしたのなぜ働かなかったの

少しアルバイトをすればパンを手に入れるくらいでしたはずどう考えてもその方が簡単だわパンヤを取ったりするより

[85:45.00]働きたくなかったからさと僕は言ったそれはもう実にはっきりしていたんだでも今はこうしてちゃんと働いているんじゃない

[85:59.00]と妻は言った

[86:02.00]僕は頷いてからビールを一口すすった

そして手首の内側で瞼をこすった何本かのビールが僕に眠気をもたらそうとしていた

[86:16.00]それは甘い泥のように僕の意識に潜り込む空腹とせめぎ合っていた

[86:26.00]時代が変われば空気も変わるし人の考え方も変わる

と僕は言ったでももうそろそろ寝ないか

二人とも朝は早いんだし

[86:42.00]眠くなんかないしパン屋襲撃の話を知りたいわと妻は言った

つまらない話だよ

と僕は言った

[86:53.00]タイトルから期待されるような面白い話じゃない派手なアクションもないしねそれで襲撃は成功したの

[87:08.00]僕は諦めて新しいビールのプルリングをむしり取った

妻は何かを書き始めから最後まで行き来通さずにはいられない性格なのだ

[87:21.00]成功したとも言えるし成功しなかったとも言える

と僕は言った

我々はパンを好きなだけ手に入れることができたけれどそれは強奪としては成立しなかった

[87:37.00]つまりパンを強奪しようとする前にパン屋の主人が我々にそれをくれたんだただでただじゃないそこがややこしいところなんだ

[87:53.00]と僕は言って首を振った

[87:58.00]パン屋の主人はクラシック音楽のマニアでちょうどその時店でワグナーの音楽をかけていたんだ

もしその音楽にしっかり耳を傾けてくれるなら店の中のパンを

好きなだけ食べて行っていいと主人は言った

僕と相棒はそれについて話し合ったそしてこういう結論に達した

音楽を聴くぐらいまあいじゃないかってね

[88:28.00]それは純粹の意味における労働ではないし誰を傷つけるわけでもないそれで我々は包丁を置いて椅子に座ってパン屋の主人と一緒に神妙な顔でトリスタンとイゾルデを聞いた

[88:46.00]そしてパンを受け取ったので

そう

僕と相棒は店に行ったパンを手当たり次第に食べた

棚が空っぽになるくらい

[88:59.00] 土木は去ってまたビールを綴った

眠気は海底地震によって生じた無音の波のように僕のボートを鈍く揺さぶっていた

[89:13.00] もちろんパンを手に入れるという初期の目的は達せられたわけだけれど

土木は続けた

それはどう考えても犯罪と呼べる代物じゃなかったそれはいわば交換だったんだ

[89:30.00] 我々はワグナーを聞きその代わりにパンを手に入れたわけだからね

法律的に見れば総取引のようなものさ

[89:40.00] でもマグナを聞くことは労働ではない

と妻は言った

その通り

[89:49.00] と僕は言った

もしパン屋の主人がその時我々に皿を洗うことやウィンドウを磨くことを要求していたら

我々はそれを断固拒否しあっさりパンを強奪していただろうねしかし主人が求めたのはただ

単にワグナーに耳を傾ける事だけだったそれで僕と相棒はひどく混乱してしまった

[90:16.00] ワグナーが出てくるなんて当然のことながら全く予想していなかったからね

[90:23.00] それは結果としてはまるで我々にかけてられた呪いに近いものだった

今にして思えば我々はそんな提案には耳を貸さず予定通りに刃物で脅してパンを単純にこう

出しておくべきだったんだ

そうすれば問題は何もなかったはずだった

[90:45.00] 何か問題が起こったの

僕はまた手首の内側で瞼をこすった

そうだね

[90:56.00] と僕は答えた

でもそれははっきり目に見える具体的な問題というんじゃない

ただいろんなことがその事件を境にゆっくりと変化していった

[91:10.00] そして1度変化してしまったものはもう元には戻らなかった

結局僕は大学に戻って無事に卒業し

[91:21.00] 法律事務所で働きながら司法試験の勉強をした

そして君と知り合って結婚した

二度とパン屋を襲ったりはしなくなった

それでおしまい

[91:36.00] そうそれだけの話だよ

土木は入ってビールの続きを飲んだそれで六本のビールは全部からになった

[91:48.00] 灰皿の中には6個のプルリングがそげ落ちた半魚人の鱗のように残っていた

[91:56.00] もちろん本当に何も起こらなかったというわけではないはっきりと目に見える

具体的な事だっていくつかはちゃんと起こったのだ

しかしそのことについては僕は彼女に喋りたくなかった

[92:12.00] それでそのあなたの相棒は今どうしてるの

と妻が尋ねた

知らないなあ

と僕は答えた

[92:25.00] その後でちょっとした事があって我々は別れたんだ

それ以来一度も会っていないし今何をしているかもわからない

[92:36.00] 妻はしばらく黙っていたおそらく彼女は僕の口調に何かしら不明瞭な響きを感じ取ったのだと思う

[92:47.00] しかし彼女はその点についてはそれ以上あえて言及しなかった

[92:54.00] でもあなた達がコンビを解消したのはそのパン屋襲撃事件が直接の原因だったのね

たぶんね

[93:06.00] その事件から我々が受けたショックは見かけよりずっと深いものだったと思う我々はその後何日もパンとワグナーの相関関係について語り合った

我々のとった選択が正しかったかについて

[93:24.00] でも結論は出なかった

まともに考えれば選択は正しかったはずだった

誰一人として傷つかずそれぞれに一応は満足したわけだからね

[93:39.00] パン屋の主人はワグナーのプロパガンダができたし我々は腹いっぱいパンを食べることができた

にもかかわらずそこに何か重大な間違いが存在していると我々は感じたんだ

[93:56.00] そしてその後龍は原理の知れないままに我々の生活にまわりつくようになった

僕がさっき鈍いという言葉を使ったのはそのせいだ

[94:09.00] 我々はいつもその影の存在を感じていた

その呪いはもう消えてしまったのかしらあなた方二人の上から

[94:22.00] 僕は灰皿の中の6個のクリームを使ってプレスレットほどの大きさのアルミニウムの輪を作った

どうだろう

[94:34.00] 世の中にはずいぶんたくさんの呪いが溢れているみたいだし何かまずいことが起こってもそれがどの呪いのせいなのか見極めることは簡単じゃない

[94:47.00] そんなことはないわ

と妻は僕の目をじっと覗き込みながら言った

[94:55.00] よく考えれば分かることよ

そしてあなたが自分の手でその呪いを解消しない限りそれは質の悪い虫歯みたいにあなたを死ぬまで苦しめ続けるはずよ

[95:11.00] あなたばかりではなく私をも含めてね

君を

だって今では私があなたの相棒なんだもん

と彼女は言った

[95:26.00] 例えば今私達を感じているこの空腹がそうよ結婚するまで私はこんなひどい空腹感を味わったことはなかったわ

ただの一度も

[95:39.00] こんなって異常だと思わない

きっとあなたにかけられた呪いが私まで巻き込んでいるのよ

[95:50.00] 僕は頷いてはにしたプリンをまたバラバラにして灰皿の中に戻した

彼女の言っていることが真実なのかどうかそれは分からな

[96:04.00] しかしそう言われればそうかもしれないという気はした

しばらく意識の外側に遠のいていた期間がまた戻ってきた

[96:16.00] その気は以前にも増して強烈なものでおかげで頭の芯がキリキリと痛い

[96:25.00] 胃の底がひきつるとそのフレーがクラッチワイヤーで頭を中心に連動されるのが

僕の体内には思っていたよりも複雑な機能が組み込まれているようだ

[96:42.00] 僕はまた海底火山に目をやった

海水はさっきよりずっと透明度を増していてよく注意して見ないとそこに水が存在することさえ見落としてしまいそうだ

[96:57.00] まるでボートが何の支えもなくぽっかりと空中に浮かんでいるような感じだ
そこにある小石の一つ一つまでくっきりと鮮明に見える

[97:11.00] あなたと一緒に暮らすようになってまだ半月しか経っていないけれど確かに私
はある種の呪いの影を身边に感じ続けてきたような気がする

[97:23.00] と彼女は言った

そして僕の顔を真っ直ぐ見据えたままテーブルの上で左右の手の指を組んだ

もちろんそれが呪いだとはあなたの話を聞くまではわからなかった

でも今ではそれがはっきりとわかる

あなたは呪われているのよ

[97:47.00] 君はその名前の影をどんな風を感じるんだろう

土木は質問してみた

何も選択していない埃だらけのカーテンが天井から垂れ下がっているような気がするのよ

[98:03.00] あれは呪いじゃなくて僕自身なのかもしれないよ

土木1桁

彼女は笑わなかった

そうじゃないわ

[98:16.00] そうじゃないことは私にはちゃんとわかるのよ

もし君が言うようにそれが呪いだとしたら

と僕は言った

僕は一体どうすればいいんだろう

[98:32.00] もう一度パン屋を襲うのよそれも今すぐにね

とカノジョは断言した

それ以外にこの呪いを解く方法はないわ

今すぐに

[98:47.00] 土木は聞き返した

えー今すぐこの空腹感が続いている間にね

果たされなかったことを今ここで果たすのよ

[99:00.00] でもこんな真夜中にパン屋が店を開けているかな

[99:06.00] 探しましょう

と妻は言った

東京は広いまちだものきつとどこかに一晩中営業しているパン屋くらいあるはずよ

[99:20.00] 僕と妻はあちこちで塗装が剥げた古いトヨタカローラに乗って午前2時半の東京の街をパン屋の姿を求めてさまよった

[99:32.00] 僕がハンドルを握り妻は助手席に座って道路の両側に肉食鳥のような鋭利な視線を走らせていた

[99:43.00]後部座席にはレミントンのオートマティック式の散弾銃が
細長い干し魚のような恰好で横たわり

[99:53.00]煽ったウィンドブレーカーのポケットでは予備の3段がジャラジャラという硬
い音を立てていた

それからコンパーメントには黒いスキーマスクが二つ入っていた

[100:07.00]どうして爪が散弾銃なんか持っているのか僕には見当もつかない
スキーマスクにしたってそうだ僕の彼女も好きになんて一度もやったことがない

[100:21.00]しかしそういうことについて一切説明はなかったし僕も質問しなかった
結婚生活というのは思ったより奇妙なものだと思っただけだ

[100:34.00]僕は閑散とした夜中の道路を代々木から新宿へそして四谷赤坂青山広尾六本
木代官山渋谷へと駒を進めた

[100:51.00]昼夜営業しているパン屋は一軒も見当たらなかった
もちろんコンビニエンスストアはたくさん開いていた

しかしコンビニはパン屋ではない

[101:04.00]たとえそこでパンが売られていたとしてもだ
我々が襲うのはファンだけを売っている店でなくてはならなかった

[101:16.00]途中で2度警察のパトロール者と出会った
1代はワニのように道路の脇にじっと身を潜めておりもう一台は疑り深いように背後から
我々の車を追い越していった

そのたびに脇の下に汗がにじんだが

妻はそんなものには目もくれず

唇をまっすぐ結び

[101:43.00]一心にパン屋を探し求めていた
彼女が体の角度を変える度にポケットの3段が枕そばがらのような乾いた音を立てた

[101:56.00]もう諦めようぜ

と僕は言った

こんな夜中にパン屋なんて開いちゃいないよ

こういうことはやはり前もって下調べをしてからじゃないと

[102:12.00]止めて

とつなが叫んだ

僕は慌てて車のブレーキを踏んだ

ここにするわ

と彼女は静かな口調で言った

[102:27.00]僕はハンドルに手を置いて周りを見回してみたがあたりにはパン屋らしきも
のは見当たらなかった

[102:36.00]道路沿いの商店はみんな黒々としたシャッターを下ろして墓場のように静ま
り返っていた

[102:45.00]床屋の赤白青の看板がねじくれたしさのように闇の中に浮かんでいた

200 M ばかり先にマクドナルドの明るい看板が見えるだけだった

[103:00.00]パン屋なんてないぜ

と僕は言った

しかし妻は何も言わずにコンパーメントをあけて布製の粘着テープを取り出しそれを手に車を降りた

[103:16.00] 僕も反対側のドアを開けて外に出た
角が車の全部にしゃがみこむと粘着テープを適当な長さに切ってナンバープレートに貼り付け番号が読み取れないようにした
それから頭に回ってそちらのプレートも同じように隠した
手慣れた手つきだ

[103:39.00] 僕はぼんやりと突っ立ったまま彼女の作業を見つめていた
あのマクドナルドをやることにするわ

[103:49.00] とツナはあっさりと言った
まるで夕食のおかずをつける時のように
マクドナルドはパン屋じゃない

[104:00.00] 土木は指摘した
パン屋のようなものよ
と妻は言って車の中に戻った

[104:09.00] 武雄というものもある場合には必要になるとにかくマクドナルドの前につけて

僕は諦めて車を200 M 前に進めマクドナルドの駐車場に入れた

[104:25.00] 駐車場には紺色のホンダアコードの新車が1台停まっているだけだった
妻は毛布に包んだ散弾銃を僕に差し出した

[104:39.00] そんなもの売ったことないし打ちたくないよと僕は抗議した
打つ必要はないわ
持っているだけでいいのよ

誰も抵抗しやしないから
[104:53.00] と角は言った
私の言う通りにするのよ

まず二人で堂々と店の中に入っていくの

[105:03.00] そして店員がようこそマクドナルドへと言ったらそれを合図にスキーマスクを被るのよ分かった
それはわかったけどでも

[105:18.00] そしてあなたは店員に銃を突きつけて全部の従業員と客を一か所に集めさせるの後は私がうまくやるから
しかし

ハンバーガーは何歳くらい必要だと思う

[105:34.00] と彼女は僕に聞いた
30個もあればいいかしら
多分と僕は言った

そして仕方なく散弾銃を受け取った

[105:47.00] 中和砂袋のように重く新月の夜の入り江のように黒々としていた
本当にこうすることが必要なのかな

[105:59.00] と僕は言った

それは半分は彼女に向けられた質問であり半分は僕自身に向けられた質問だった
もちろんよ

と彼女は言った

[106:15.00] ようこそマクドナルドへ

マクドナルド帽をかぶったカウンターの女の子がマクドナルド的な微小かけて北に入った
[106:27.00]僕は深夜のマクドナルドでは女の子は働かないものだと思い込んでいたので
[106:33.00]彼女の姿を目にして一瞬頭が混乱したがそれでもすぐに思い直して好きにマスクを頭からすっぽりとかぶった

[106:44.00]カウンターの女の子は突然好きになるこをかぶった我々の姿を目にして言葉を失った

[106:53.00]そのような状況についての対応法はマクドナルド接客マニュアルのどこにも書かれていないのだ

[107:01.00]彼女はようこそマクドナルドでも次を続けようとしたが出てくるのは無言の時だけだった

それでも営業用の微笑は行き場所をしなっただまま

[107:15.00]明け方の三日月のように唇の端のあたりに引っかかっていた

[107:22.00]僕は急いで毛布を解いて銃を取り出しそれを客席に向けたが客席には学生風のカップルが一組いるだけでそれもプラスチックのテーブルにうつぶせになって深く眠り込んでいた

[107:39.00]テーブルの上には彼らの頭が二つとストロベリーシェイクのカップが二つ前衛的なオブジェのように並んでいた

[107:50.00]アリは冬眠でもしているみたいに意識を失っていたのでそのまま放っておくことにした

そして15カウンターの中に向けた

[108:03.00]マクドナルドの従業員は全部で3人だった

[108:08.00]カウンターの女の子と20代後半と思える血色の悪い卵型の顔をした店長と奥行きをほとんど持たない薄い影のような調理場の学生アルバイトだった

[108:23.00]3人はレジスターの前に集まってインカの井戸を覗き込む観光客のような目つきで僕の構えた銃口を見つめていた

[108:34.00]誰も悲鳴をあげたりしなかったし誰もつかにかかっては来なかった

10はひどく重かったので僕は引き金に指をかけたまま重心をレジスターの上に乗せた

[108:49.00]彼はあげます

と店長がしゃがれた声で言った

[108:57.00]11時に回収しちゃったからそんなにたくさんはないけれど全部持って行ってください

保険がかかっているから構いません

[109:08.00]正面のシャッター降ろして看板の電気を消しなさい

と妻は事務的な声で言った

待ってください

と店長は言った

[109:24.00]それは困ります勝手に店を閉めると私の責任問題になるんです
本部に始末書を書かなくては

[109:37.00]同じ命令をもう一度ゆっくりと

さらに事務的に繰り返した

言われた通りにした方がいい

土木は彼に忠告した

[109:52.00]店長はレジスターの上の重工と妻の顔をしばらくは比べていたがやがて諦め

て看板の明かりを消しパネルのスイッチを押して正面扉のシャッターを降ろした

[110:07.00]どさくさに紛れて彼が非常警報装置か何かのボタンを押すのではないかと僕はずっと警戒していたがどうやらマクドナルドには非常警報装置は設置されていないようだったハンバーガーショップが襲撃されるかもしれないなんて誰も思いつかなかったのだろう

[110:30.00]正面のシャッターはバットでバケツを叩いてまわるような大きな音を立ててしまったがそれでもテーブルのカップルはまだ昏々と眠り続けていた

[110:43.00]そこまで深い眠りを僕はその前も後も目にしたことがない

ビッグマックを30個テイクアウトで

と妻は言った

[110:57.00]お金を余分に差し上げますからどこか別の店で注文して食べてもらえませんか

と店長が言った

会計の処理がすごく面倒になるんですつまり

[111:13.00]言われた通りにした方がいい

ふと僕は繰り返した

3人は連れ立って調理場に入り30個のビッグマックを作り始めた

[111:27.00]学生アルバイトがハンバーグを焼き店長がそれをパンに挟み女の子が白い包装紙で包んだ

その間誰も一言も口をきかなかった

[111:42.00]僕は営業用の大型冷蔵庫にもたれて散弾銃の銃口グリドルの上に向けていたグリドルの上には茶色い水玉模様のように肉が並びチリチリという音を立てていた

[111:58.00]肉の焼ける甘い匂いが目には見えない話のように僕の体中の毛穴から潜り込み血液に混じって体の隅々を巡った

[112:12.00]そして最終的には僕の体の中心に生じた上の空洞に集結しそのピンク色の壁面にべったりしがみついた

[112:25.00]白い包装紙に包まれて脇に積み上げられていくハンバーガーを一つか二つ手にとってすぐにでも貪り食べたかった

[112:36.00]しかしそれはおそらく我々の目的に沿った行為ではあるまい

妻もきっと喜ばないだろう

[112:45.00]だから30個のハンバーガーがきちんと揃うまでじっと我慢することにした調理場の中は熱く僕はスキーマスクのスタで汗をかきはじめていた

[113:02.00]3人はハンバーガーを作りながら10秒おきに10項に目をやった

僕は時々左手の小指の先で両方の耳を書いた

[113:15.00]僕は緊張すると決まって耳の穴が痒くなるのだ

僕が好きマスクの上から耳の穴をかくと重心が不安定に上下に

[113:29.00]それが3人の気持ちを少なからずに出すようだった

[113:34.00]銃の安全ロックはかけたままだったから暴発の心配はなかったのだが三人はそのことは知らなかったし僕の方もわざわざ教えるつもりはなかった

[113:49.00]3人がハンバーガーを作り僕が重厚ブリドリに向けて見張っている間妻は客席を覗いたり用意できたハンバーガーの数を数えたりしていた

[114:02.00]彼女は包装紙に包まれたハンバーガーを紙の手提げ袋煮詰めて行った

[114:09.00]ひとつの手提げ袋には15個のビッグマックハンバーガーが入ったどうしてこんなことをしなくちゃいけないんですか

女の子が僕に言ったか

[114:23.00] お金を持って逃げてそれで好きなものを買って食べればいいのにビッグマックを30個本当に食べるんですか僕は何も答えずただ首を横に振った

[114:39.00] 悪いとは思うけれどパン屋が空いていなかったのよと妻がその女の子に説明した

もしパン屋が空いていればちゃんとパン屋を襲ったんだけど

[114:56.00] それが何かの説明になっているとは僕にはとても思えなかったけれどとにかく彼らは諦めてそれ以上口をきかず黙って肉を焼きパンに挟み包装紙に包んだ

[115:13.00] 二つの手提げ袋に30個のビッグマックがきれいに収まると妻は女の子にラージカップのコーラを二つ注文しその代金を払った

[115:26.00] パン以外には何も取る気はないのよと妻は女の子に説明した女の子は複雑な形に頭を動かした

[115:40.00] それは首を振っているようでもあり頷いているようでもあった多分両方の動作を同時にやろうとしたのだろう

彼女の気持ちはなんとなくわかるような気がした

[115:57.00] 妻はそれからポケットから荷造り用の細挽きの紐を取り出し3人の体をボタンでも縫い付けるみたいに要領よく柱に縛りつけた

3人はもう何を言っても無理だと悟ったらしく黙ってされるがままになっていた妻が

[116:19.00] 痛くないとかトイレに行きたくないとか聞いても彼らは一言も口をきかなかった

僕は毛布20を包み妻は両手にマクドナルドのマーク入りの手提げ袋を持って裏口から外に出た

[116:40.00] 客席の若いカップルはその時になってもまだ深海魚のようにぐっすりと眠り続けていた

呼吸をしている様子も見えなかった

[116:53.00] このような深い眠りをいったい何が破ることになるのだろう30分ばかり車を走らせてから

[117:02.00] 適当なビルの駐車場に車を止め心ゆくまでハンバーガーを食べコーラを飲んだ僕は胃の空洞六戸のビッグマックで満たし彼女は4個を食べた

[117:18.00] それでも車のバックシートにはまだ二十個のビッグマックが残っていたよが明ける頃には我々のあの永遠に続くかと思えた深い息がもう消滅していった

[117:34.00] 太陽の最初の光がビルの汚れた壁面をフジ色に染めソニーブルーレイレコーダーの巨大な広告と眩しく光らせて時折通り過ぎていく長距離トラックのタイヤ音に混じって鳥の声が聞こえるようになった

我々は二人で一本のタバコを吸った

[118:00.00] タバコを吸い終わると妻は僕の頬にそっと頭を寄せたでもこんな事をする必要が本当にあったんだろうか

[118:13.00] 僕はもう一度彼女に尋ねてみたもちろんよ

と彼女は答えたそして一度大きく息を吐いてそのまま眠りについた

[118:27.00] 彼女の体は猫のように柔らかくそして軽かった

[118:36.00] 一人きりになると僕はボートから身を乗り出して海の底を覗き込んでみた

でもそこにはもう海底火山の姿は見えなかった

[118:49.00]水面は静かに空の青みを映し

小さな波が風に揺れる絹のパジャマのようにボートの特番をやわらかく叩いているだけだ

[119:04.00]僕はボートの底に身を横たえて夫婦市満ち潮がしかるべき知れに運んで行ってくれるのを待った